

琉球大学学術リポジトリ

龍柱について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/942

龍柱について

西村貞雄

The Dragon Pillars

Sadao NISHIMURA *

To point out in detail the characteristics of The Dragon Pillars in front of the main hall of Shuri Castle, by comparing them with the form of ordinary dragons.

I はじめに

麒麟、鳳凰、龍等、架空の動物は数多くある。特に中国の瑞鳥、瑞獸等のような想像上の動物をみたとき、中国の歴史の深さを知る。

沖縄にも古い文献等にある建造物の中の彫刻や玉陵の勾欄浮彫には、蝙蝠、獅子、麒麟、鳳凰、龍、鶴等の絵柄があり、中国との関わりがあることを新ためて認識する。技法や様式等を調べ、中国にあるものと比較することによって、時代や地域性が解明され、去る大戦で破壊され損失した物を復元するのに一つの手掛り^{あびょう うんぎょう}がつかめる。しかし、首里城正殿前^{あびょう うんぎょう}にある阿形、吽形の龍柱については、筆者が調査した範囲内では、同形態の龍は存在しなかった。

その龍柱について、復元(縮尺 $\frac{1}{5}$)する機会を得たことにより、新ためて独得な形態を持つ龍柱であるという感を深めたのである。

この稿では、そのような観点から首里城正殿の龍柱について述べる。

II 龍について

龍は世界各地で古来から異形の動物として神話に登場する。形の基本をなすのは蛇であるが、ヨーロッパ、オリエントでは、有翼四足のスタイルであらわされる事が多い。一部ヨーロッパでは富と幸福をもたらすものとして考えられるが、一般的には悪と暗黒を象徴するものとして形象化され、英雄又は神が龍の守る宝物を奪いこれと戦うものとなっている。

インドでは毒蛇の影響が強く、蛇神崇拜の風が古来からあった為、善悪両面に関与するものとし

てあらわされる。形はやはり蛇が基となっているが、神通力をそなえ、変幻自在に姿を変えるとされている。

中国では龍は、麒麟、鳳凰、亀とともに四靈として神秘的な動物とされている。水に関係の深いものとされており、蛇を原型としたことは確かではあるが、星、雷光、竜巻等が諸要素となって構成されていると思われる。

日本の龍は、中国の影響をうけ祥瑞とする受取り方もあるが、神話のうえでは、水神、海神としてあつかわれており、龍は海神の娘であるとされる事もある。

日本及び中国の龍は、ほとんど同様の形をしており、胴は蛇、角は鹿、目は鬼、耳は牛にそれぞれ類似し、四足を持ち体には剛鱗をもつとされている。概して、西洋の龍が悪の化身としてあらわされる為、表現上、重々しさにかける面があるのに対し、日本及び中国の龍は、神としての尊崇^①を受ける為、威厳ある姿で現される事が多い^①。

1. 鬼龍子^②

中国では、建築物の屋根に多種多様な形の飾りが置かれ、日本の屋根には見られない現象が際立っている。特に廟や仏塔、城の屋根には多く見られ、それら動物や人間を組み合わせた物を総称して鬼龍子と言う(写真①②)。鬼龍子は単なる屋根に添えられた装飾物の範囲内におさまるものではなく、建築物の重要な一部をなしている。自然現象が激しく大嵐や豪雨にしばしば襲われる中国では、建築物にもあらゆる面での防備を考慮している。鬼龍子もその一端の現われであり、守護神として、

* Coll. of Educ. Univ. of the Ryukyus

人々の保護を託し、外界からのあらゆる悪から屋内の人々を護ると信じられている。

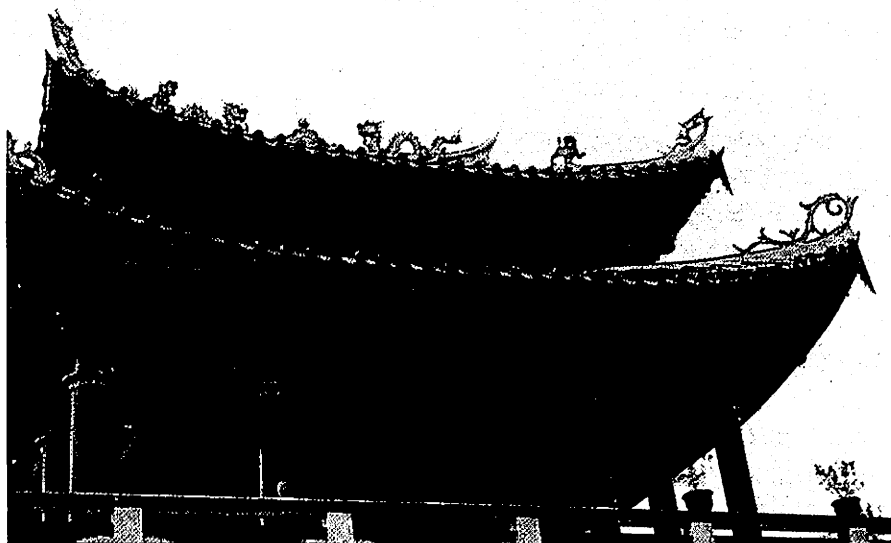
古代においては、アニミズム（自然のさまざまな力に支配されているものと感じる一万有精神説）の思想が、どの地域でも受け入れられていたが、中国においてもその例にもれず、認識できうる現象世界だけでなく、感覚の世界においてもあらゆるものが霊をもっているという考えが支配しており、建築物を造る際にも、屋根の技術的構造の堅

固さだけでは満足できず、アニミズム的な考えに基づいた守護者としての鬼龍子を配することにより、精神的な支えとし、これによって完全な備えとしたのである。

鬼龍子には動物と人間両方の形態がある。龍、鳳凰、麒麟、獅子等架空の動物、犬、馬、兎、鶏、鳥、^{いりか}海豚等の実在する動物、それと人間の姿をした学者、聖者、鬼、軍神、英雄等であるが、中でも龍は守護の象徴として重要視されている。



中国、濰州の新華東路の石門



中国・開元寺等にみられる屋根

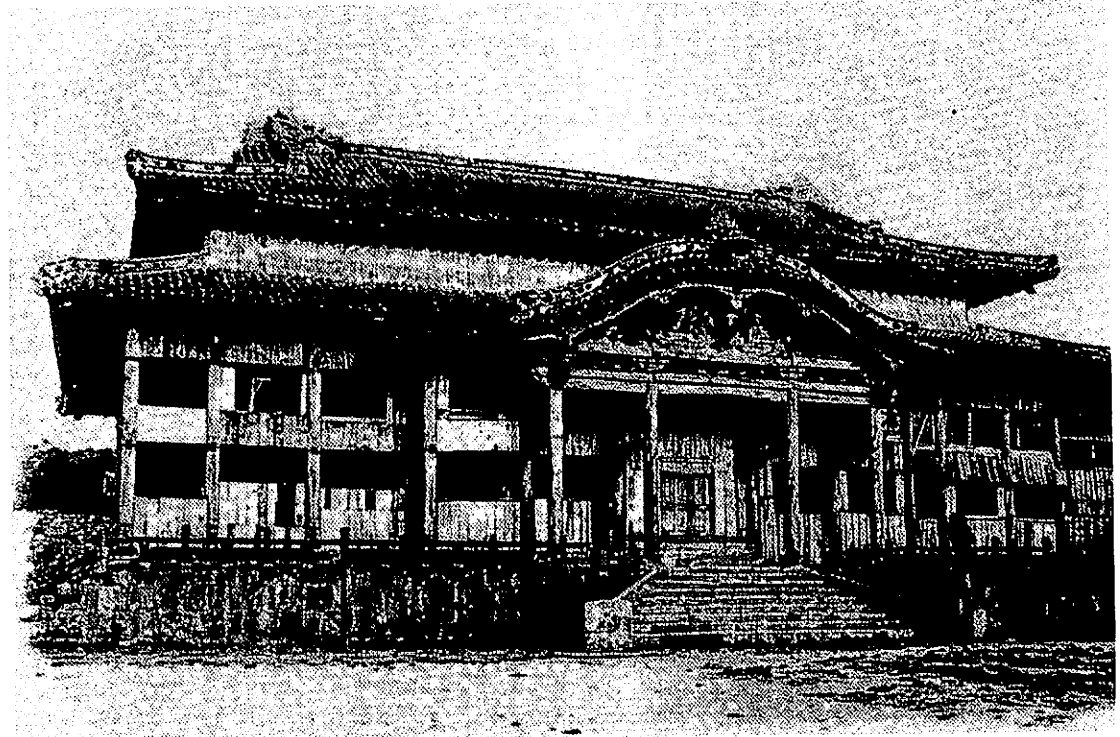
2 中国との関わり

古来中国では、龍は水と関わりの深いものと考えられていた。水神の性格を備えた靈獣が龍であり、水から連想される、雨、雲、雷（稲妻）は、龍の象徴であるとともに、人々はこれらのものから具体的な龍のイメージを作り上げていったと考えられる。農耕文化を持った古代中国では、灌漑が国政の根本と考えられ、「水を治める者は、国を治める」と言われており、この面からも龍はその力をあがめられ、その地位を確立したと思われる。この様に力を持った龍は、当然自然の脅威から人々を護ってくれるとされ、屋根の上にこの像を置けばあらゆる災厄から逃れられると考えられる。具体的に言っても、屋上の龍は、避雷針の役割を果し、龍と雷との関連を人々に印象づけていった。

この様な考えが、琉球王府にも影響を与えたことは当然であり、首里城正殿（写真③）にも数多

くの龍が配されていた。正殿屋根大棟の両端には、棟を噛むような形で龍の頭部が置かれており、正面向唐破風の屋根中央には、正面向きの龍頭が大きな口を開け歯をむき出しに構えている。唐破風の妻飾りにも、中央に宝珠を置きその左右に龍が配された浮彫りが施されているし、屋根の下り棟の端には獅子の頭部がある。この様に中国で生まれた龍崇拜の考えは、鬼龍子という型こそ変えてはいるものの首里城にも受継がれており、権威の象徴としての龍が重要な地位を占めていることには変わりはない。

この首里城正殿の特筆されるべきことは、屋根だけではなく、石造の正面階段の上部に小龍柱、末広がりになった下部に大龍柱が据えつけられていたことで、この細粒砂岩（俗称ニービヌフニ）で造られた龍柱は、他にみられない独得な形態であることが、中国北京の清華大学建築歴史研究室主任、呉煩加教授にも指摘されている。



写真③ 首里城正殿

3 龍の形態

龍の形については、「猛獣の蹄と口をもち、同じく鋸状の脊椎をもった蛇」「体は大蛇で、獣類の四本の足、馬の毛、鹿の足、犬の爪、魚の鱗とひげがついている」^③等蛇を基本に獣を加味した想像上の動物となっている。

普通龍といえば、上記の内容からも想像できるような細長く、鋭い爪のある四本足の爬虫類の形態を連想し、一般的に曲線的で、側面性の強い絵画的なものが多い。

例えば、鎌倉芳太郎^④が戦前撮影している琉球の美術工芸品（写真④⑤⑥⑦⑧）に表わされた龍の形態をみても、表現上の角度や方向は工夫されているが、一般的な龍の形態そのままである。石（写真⑨）や木（写真⑩⑪⑫）に彫り込んだ龍については、量感のある表現がなされ、平面上に表わされたものとは一味違うが、形態には変わらない（写真⑬）。又、建築に附随した龍においてもこれは変わらず、巻きついた形や、くねらせた形が主である。



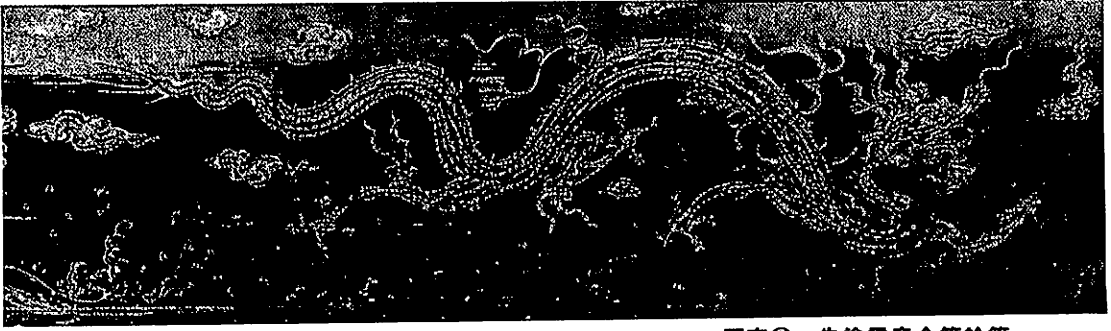
写真④ 国王着用衣料図案



写真⑤ 皮弁服仕立図案



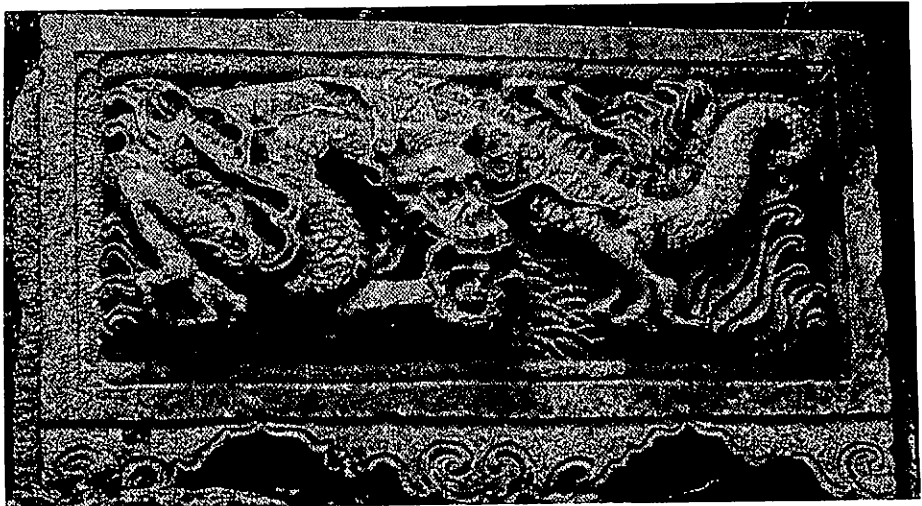
写真⑥ 国王着用足袋刺繍



写真⑦ 朱塗雲竜金箔絵箱



写真⑧
黒塗青具双竜文
八花御菓子器

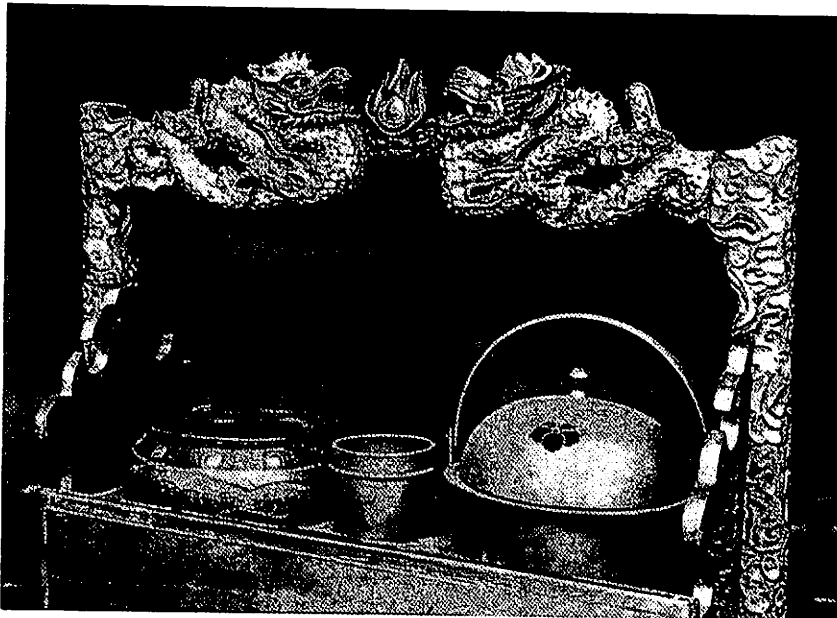


写真⑨ 龍淵橋
欄干羽目(竜)



写真⑩那覇文廟（至聖廟）
孔子祭用器具裝飾竜

写真⑪仏壇上部左右隅透彫飾



写真⑫
飛竜把手煙草盆
グダウシュマイ作

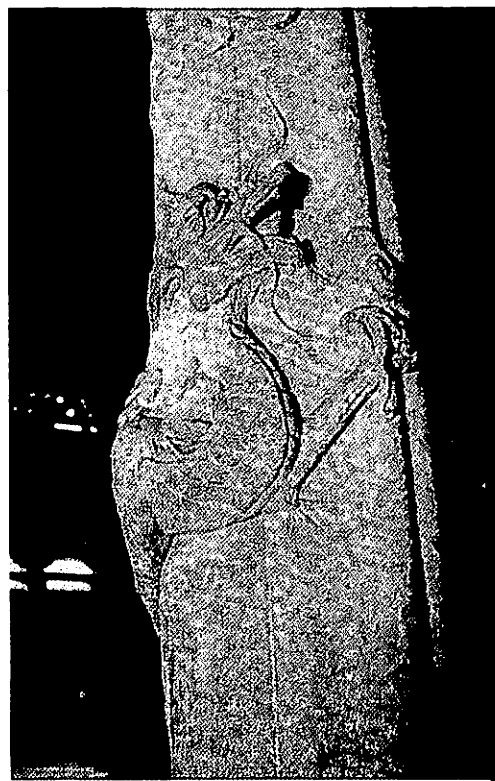


写真⑬ 中国
頤和園

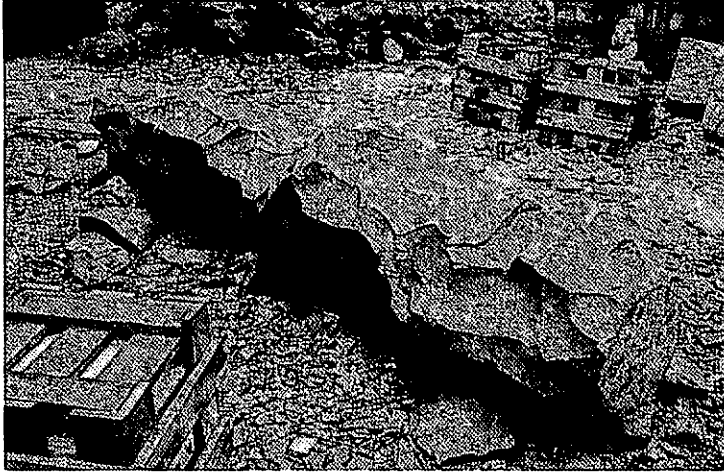
中国福建省福州市にある鼓山にも龍の柱がある。泉州市の開元寺にある龍の柱も一本の石の柱に、螺旋状に直に龍が彫り込まれている（写真⑭⑮）。現在でも恵安県の石材工場では、写真にみられるような形で彫刻を施している（写真⑯⑰）。それは採石された一塊の柱の起伏に合わせた直彫りである。



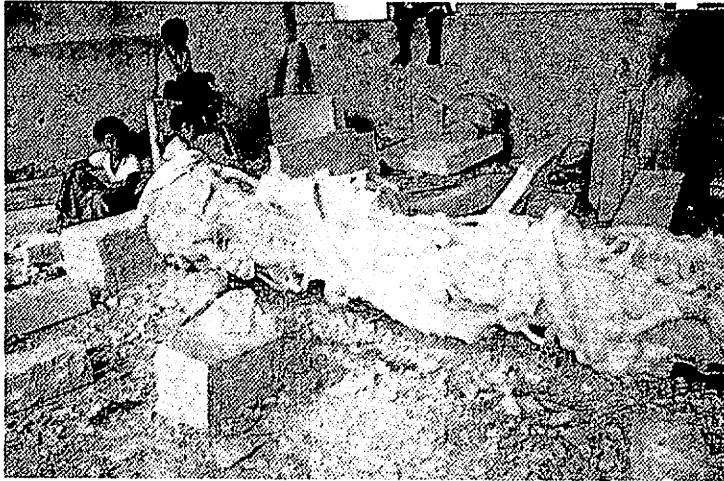
写真⑭ 中国・福州市・鼓山



写真⑮ 中国・泉州市
開元寺



写真⑩ 中国
恵安県石材工場

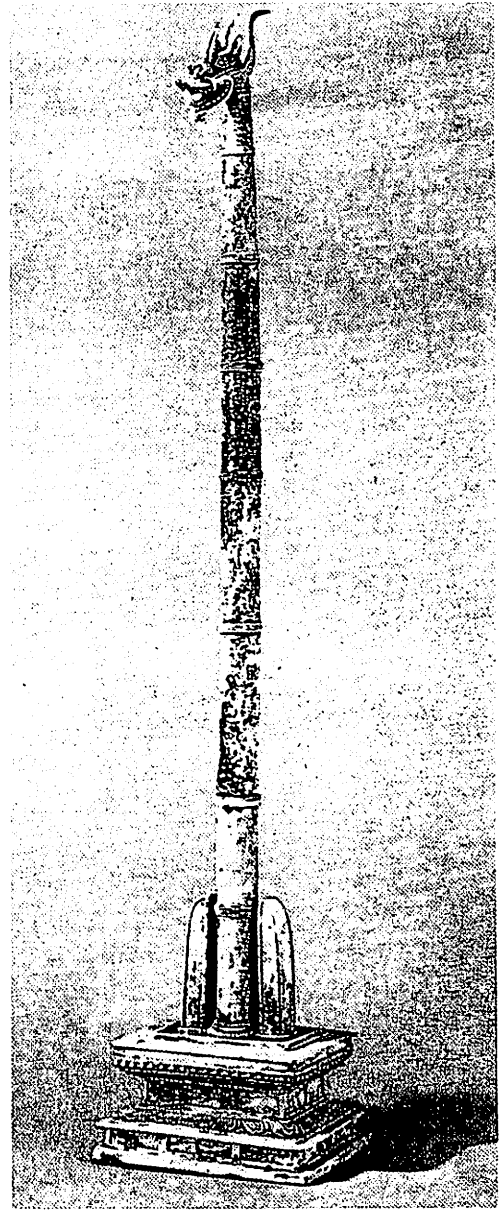


写真⑪ 同上
龍の直彫り

置物や船首の飾り等には、文献を見ると直立した形態があり、例えば、韓国高麗時代の龍頭宝幢（小型の旗ざお）^⑩（写真^⑩）では、直立した形が機能的に活かされ、装飾として効果をあげている。しかし、首里城正殿の龍柱のように、龍の胴体が柱に見立てられている例は、どこにも見受けられず、独自のものであると思われる。



右の拡大 頭部に特徴がある。



写真^⑩ 韓国高麗時代
龍頭宝幢（小型の旗ざお）

Ⅲ 首里城正殿の龍柱

首里城正殿の戦前の写真は、明治、大正、昭和初期と撮影時期の違いはあるが、撮影方向、角度は何れも限られており、龍の細部についての記録はほとんどない。

復元作業の参考となる写真は、次の様に限られていて、その写真から龍柱のみを拡大した（写真⑱⑳）。



写真⑱
首里城正殿前大龍柱吡形

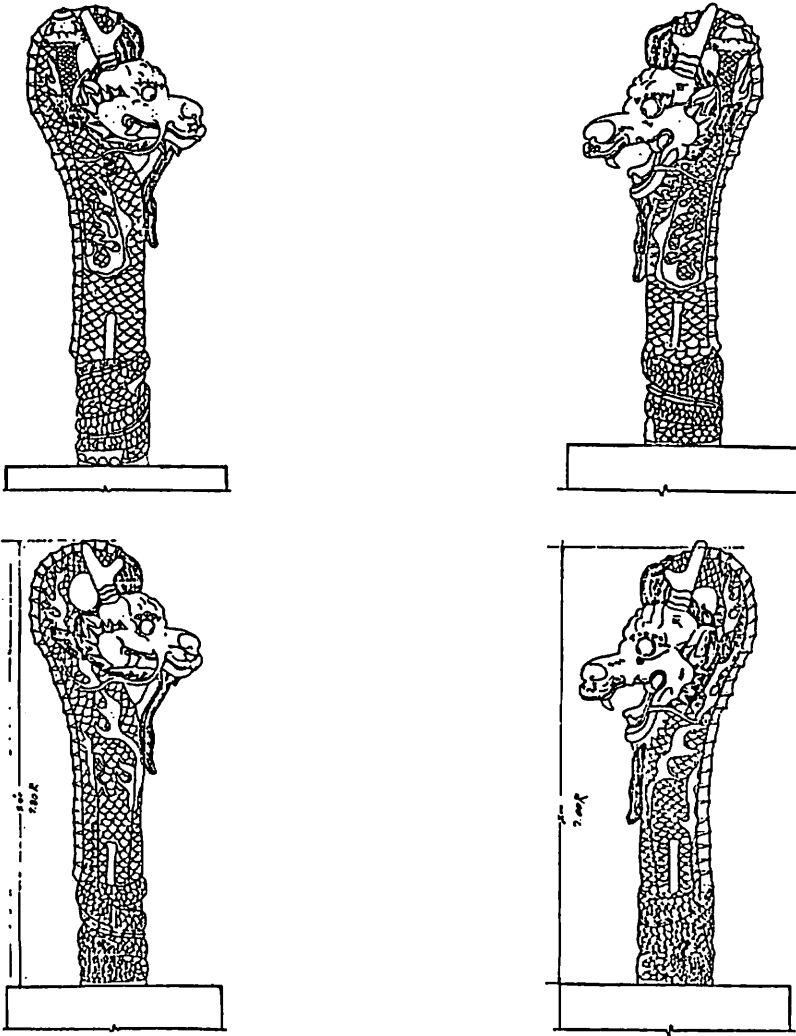


写真⑳
首里城正殿前大龍柱阿形

以上の写真は龍柱を復元（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）した際使用した写真の一部である。

復元については上記のほかに、沖縄県立博物館正面玄関前に据えられた吽形頭部や倉庫にある

残片遺物、及び琉球大学風樹館、先般の発掘調査での残片遺物を基に、文化庁が昭和八年頃作成した『国宝建造物沖縄神社拜殿図』（解体修理時の実測図面）（図1）と照合する形をとってすすめた。

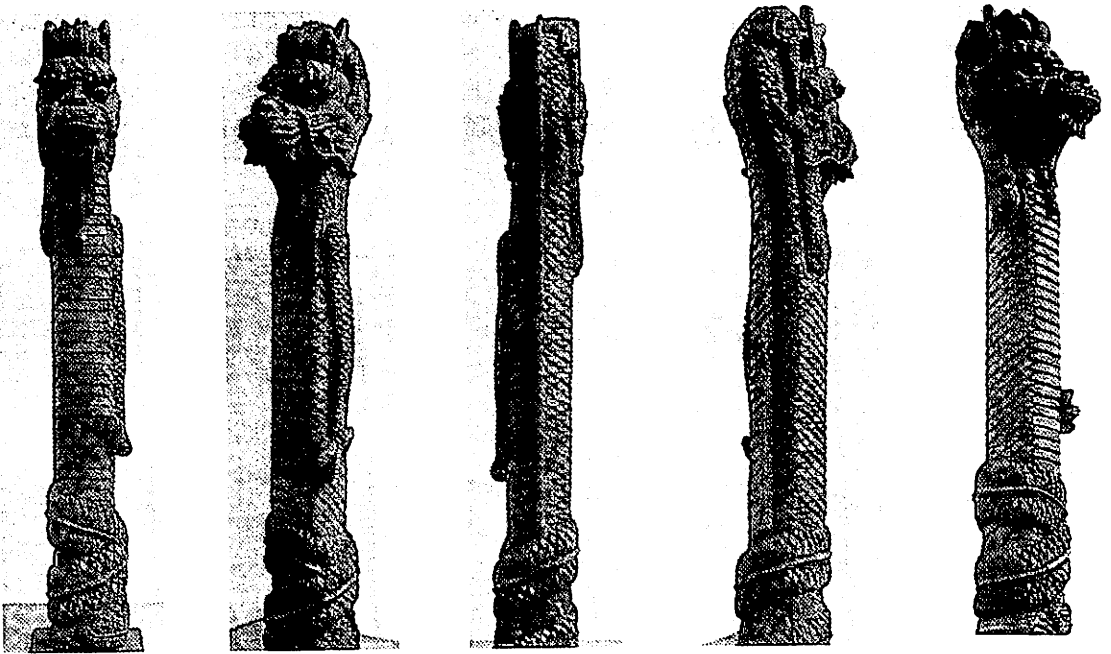


（図1） 国宝建造物沖縄神社拜殿として首里城正殿が国宝に指定されたときの図面（文化庁）

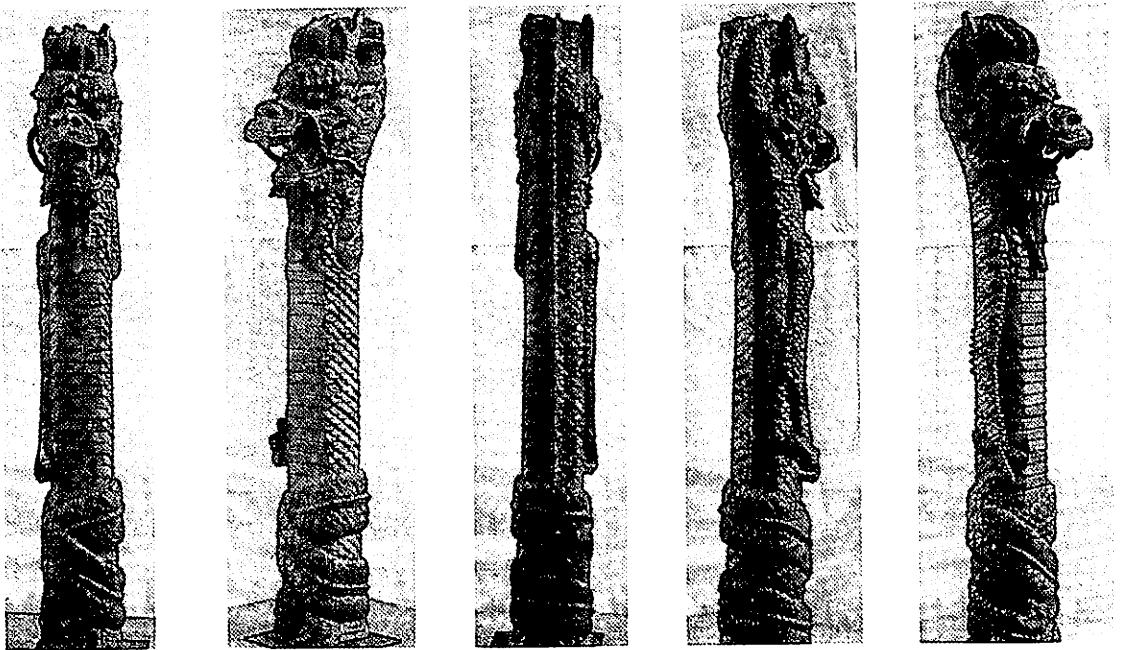
ただこの場合、明治時代に胴体中央部は、上記掲載の写真にみられるように、破壊されている。しかし今回は、その胴体中央部も含めた1712年首里城正殿再建時の龍柱を復元することとなった。

1768年（乾隆33）に作成された『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（沖縄県立芸術大学

蔵）及び昭和2年3月発行『アトリエ』第四巻、第三号に掲載されている比嘉朝健の『琉球の石彫刻龍柱』についての論文に寸法の記述があり、それらを基にして高さを3,106%とし、それに合わせて縮尺 $\frac{1}{5}$ の復元をしたのが下の写真①②である。



写真② 首里城正殿前大龍柱吡形（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）



写真③ 首里城正殿前大龍柱阿形（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）

この形を追求して復元するには、かなりの時間がかかった。限られた写真であること、しかも龍柱が欠落破損しているのです、龍の形態解釈に手間ど

り、鱗、背鰭うろこ、背鰭せびれを一つ一つ確認しながら立体像にしたのである。

1. 首里城正殿大龍柱の特徴

この龍は、爬虫類の特徴を完全に柱という限定された石の中に集約した抑制表現がとられている。守護としての龍柱は、阿形、吽形の形態をとり、二体で一对をなしている。阿形は、左前脚を上にあげ宝珠をもち、右前脚は下方へ下して鋭い爪を構えさせ、吽形は阿形と左右対称の形をとっている。胴体を垂直に伸ばし、それ自体で柱をつくりあげており、太い四角形の柱の四隅を丸くとり、正面に腹板、左右の側面から後面にかけて鱗が均一に施され、後面中央に背鱗が垂直に伸びている。何れも整頓化され、均一に装飾的に表わされている。

胴体上部には、前脚・肩が位置しており、上下に向う左右前脚をうまく処理している。肩から胴体部にかけては、徐々に細くなり、側面からみると、頸部に当るところは、弧を描いて頭部につながれており、弧の中心は割り抜かれている。その態勢は、爬虫類独得の威嚇攻撃の構えであり、胴体を垂直に伸ばし、かま首を持ち上げ、顎を引き付けた形は、硬直な柱の中に動的な要素を加えて、形態上美しい曲勢を作っている。

この首の構えは、阿形と吽形では形は異なり、それぞれに十分迫力があり、独自の雰囲気醸し出している。(図②)



吽形 (図②) 阿形

シルエットでみることによって、形の違いが分かり、それぞれフォルムの美しさがある。

頭部に於いては、普通見受けられる龍では、面長な顔面をし、眉毛、鬚、口髭等が房々として、目に鋭さがあり、一見仙人を感じさせる。海北友松筆の雲龍図^⑧と、龍柱の顔面を比較すると(写真^⑨)、雲龍図に於いては、ヒゲが顔面の大部分を占めており、ヒゲの中の眼球が印象的で、鼻は鷲鼻で瘦こけた感じを与えるのに対し、龍柱は房々としたヒゲではなく、整頓し、様式化された形に統一され、鼻先の髭も楓の葉のような形で装飾的に表現されている。眼球の形も単なる球体ではなく工夫され、瞳孔に当る部分は、円の線影りがある。額から眉間、眉毛にかけての肉盛りや、頬から口辺部にかけての生き生きした表現に、さらに牙、前歯二本を加えることによって、生々しい表現となっている。重厚みのある鼻、その下の肉盛りが量的で絵画に表わされている形とは異なる(写真^⑩)。

垂直に伸びる胴体からかま首をもち上げ構えた体勢を、さらに強調しているのは、鬚であり、鬚と関連させることによって胴体部につなげて、龍柱という形をつらぬき特色をうち出している(写真^⑪)。

頭部を前面から見ると、額の中央部をへこませ、それに合わせ眉毛をつりあげて迫力を与えており、阿形に於いては、吽形よりもさらに強調されている。(写真^⑫)

鼻梁の側面に三本の筋を入れ、髭鬚が長く伸びて胴体部につながっている(写真^⑬)。

口は大きく斜めに裂け、それを伸ばした形で耳につながっている。又、それに関連して頬髯も強調されている(写真^⑭)。

角は鬚と調和させ、精悍な感じを強めている(写真^⑮)。

頭部だけにしぼっての表情をみると、正面からは、量的ながっしりした鼻を中心に据え、左右に突き出た眼球、左右に伸びる髭鬚、鼻の下の肉盛りや分厚い唇は、他の龍には見られない形態をつくっており、彫刻ならではの量的表現となっている。さらに見る角度を変えて正面から見ると、鼻の下の髭(楓の葉に似た形)(写真^⑯)といい、前歯2本といい(写真^⑰)、先に重厚さに加えて威厳を感じさせていたものが、急にユーモラスな表現として目に映ってくる。鬚はモヒカン刈り

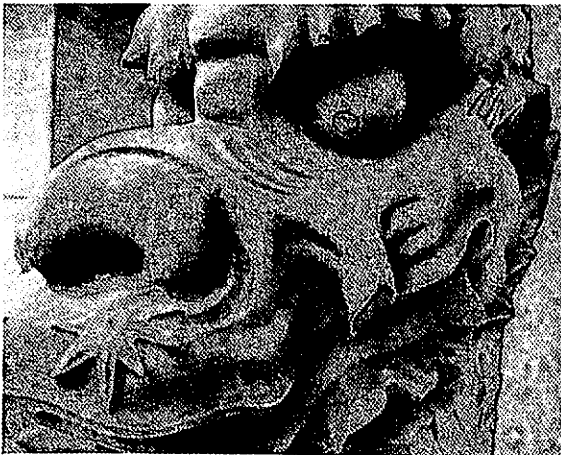
(写真②)を感じさせ、見る方向によって印象が
変わり、観者を楽しませてくれる。(写真③)



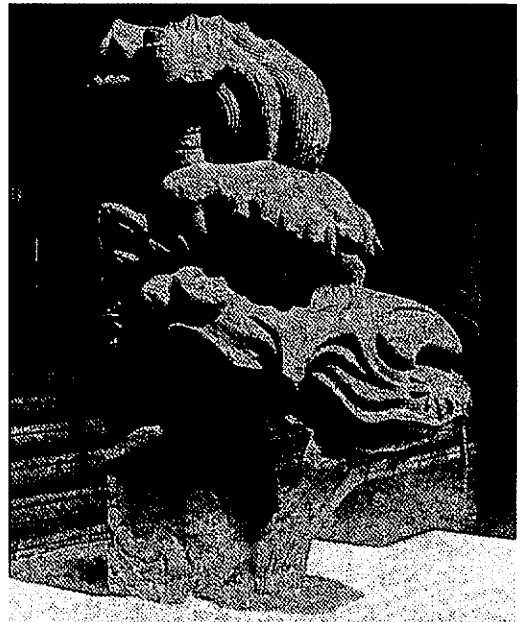
大龍柱咩形頭部
(沖縄県立博物館)



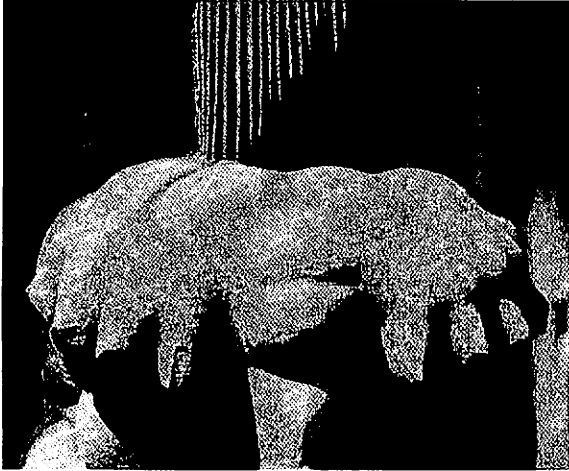
海北友松筆 雲龍図



写真④ 生々しさの中に装飾性が加味され迫力をつくっている。



写真⑤ 鬣と顎鬚によって構えがより強調される。



写真② ゴツゴツした肉盛りが力強く感じさせる。



写真⑦ 鼻梁の3本筋と鱗髯



写真⑧ 大きく斜め上に裂ける口



写真⑨ 角と鬚



写真⑩ 楓の葉に似た髯



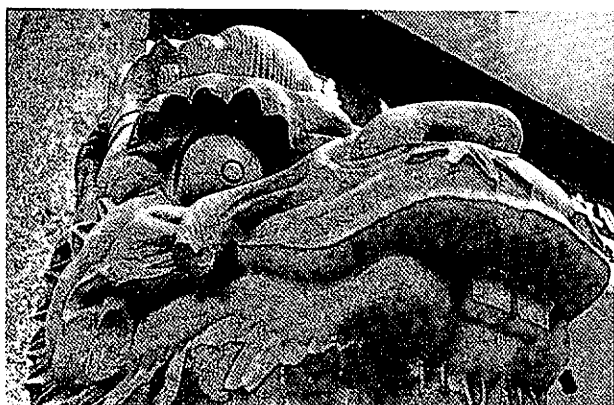
写真⑪ 前歯2本



写真④ モヒカン刈りを
思わせる表情



(写真③)
見る角度によって
瘦た感じにも見え
たり表情は観る者
に千変万化の感を
与える。



動物には、見る方向によってそのものの特徴を一番よく現わしている形がある。方向によっては、印象しやすいが、描いたり造ったりするのに表現しにくい面もあり、反対に表現はしやすいが、印象しにくい所もある。

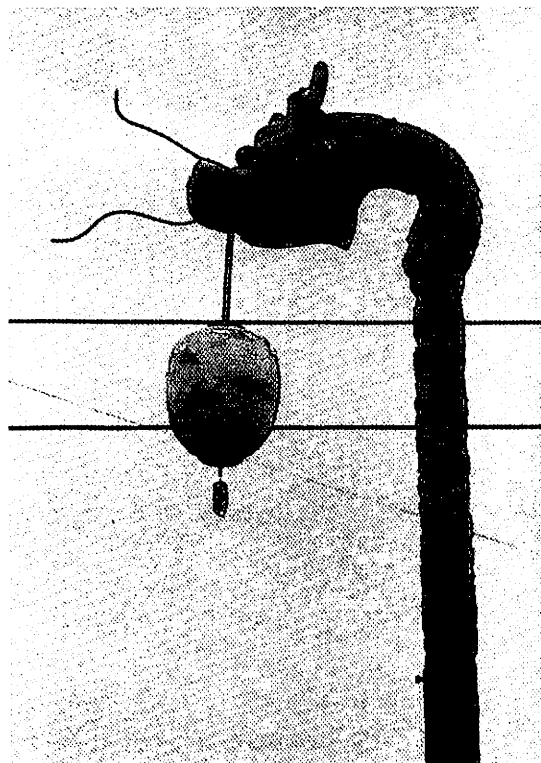
龍に於いては、一般に側面像の方が龍らしいという印象が強く、描いたり造ったりするうえからも側面の方が特徴もつかみやすい。この龍柱の側面からの姿は頭部のかま首を構える形は鋭く、形態の美しさをつくっており、印象深い。

龍を表現するには、これまで挙げてきたような表現形態があるが、彫刻として表現するには、場所や空間をとる為、かなりの制約を考慮しなければならない。蟠局を巻く形や、写真⑭にあるような方法は、普通一般に考えられる形である。

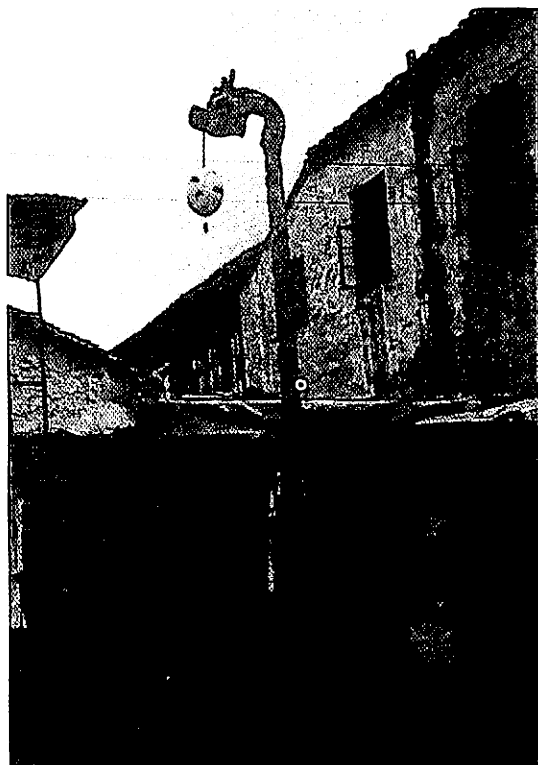
首里城正殿の龍柱の場合は、階段両側の欄干に合わせて設計されているので、空間を大きくとるわけにはいかない。その為、上に伸ばした構えをとり、威厳のある門衛像となっている。

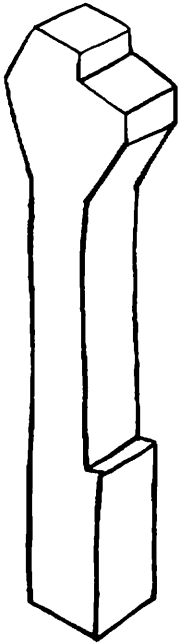
この龍柱は、^{とぐろ}蟠局を巻いた形を柱に見立てている。角柱に龍を組み込みデザイン化しているので、胴体部は、普通の比率で考えると、細い形になりやすい。写真⑭のようになって弱々しい。そこで工夫されたのが、石材という素材（写真⑮）からの影響で、太くて四隅を丸くとした形であり、これで上下の量や重さからも釣り合いがとれていると考えられる。上部に頭部をもっていき、そこでも制限された塊の中に、見事に龍の頭部を表している。しかも、生身の動物の特徴を生かして、動的な形にしているが、よく見ると装飾的效果も十分に考えられ、調和させている。

垂直に伸びた胴体の下には、尾が^{とぐろ}蟠局を巻いており、角柱という枠の中におさめてある。普通にみられるような、ゆるやかなカーブで^{とぐろ}蟠局を巻いているのではなく、ぎっしりと縛りつけた形にデザイン化しており、しかも、尾の先端を正面に収めた工夫は、改めて感心させられるものである（写真⑯）。

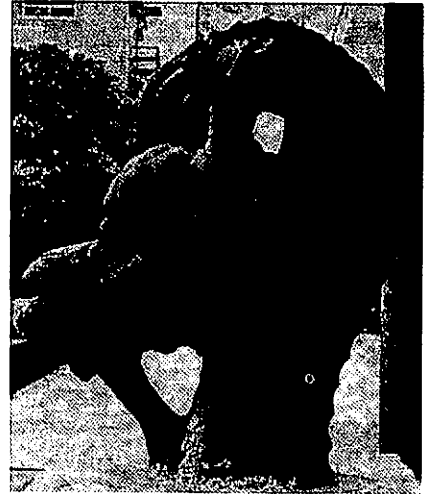
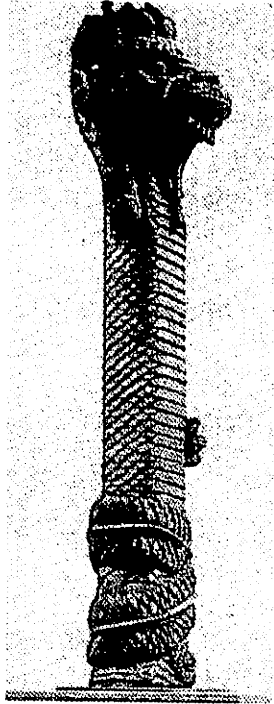


写真⑭ 中国、蘇州にある龍の街灯。





写真㉔ 大龍柱の製作に必要とされる石材の面取り



かま首をデザイン化している。

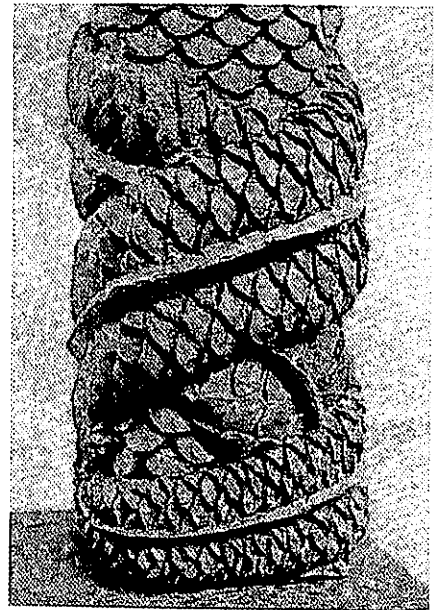


写真㉕ 巻きつけについての考察



尾の先端が正面に収まっている（腹面は正面）。
右上にかすかに見えるのは掌。

大龍柱・復元下部巻きつけ部分



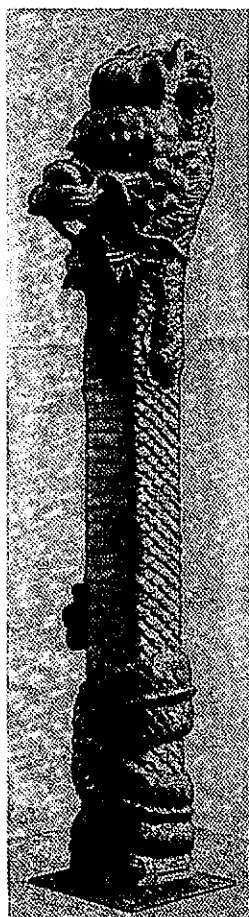
龍柱の下部・尾の巻きつけ

胴体中央部の鱗や腹板、背鳍は均一で、薄板を張りでもしているような感じを与える。しかし、巻きつけ部分から先端までの尾は、徐々に細くなり、鱗には生き生きした動きが感じられる。(写真⑦)

この巻きつけ部分は、いわゆる蟄局もぐろとは違う形に尾が巻きついている為、復元の際には、鱗をた

よりに確認をとりながらの作業で絡繰りからくりを解くようなものであった。この作業の結果から判断すると、地下から胴体が垂直に伸びて頭部に至り、一方で尾は垂直に伸びた胴体に螺旋状に巻きつきながら、下に向けた前脚の掌の近くまで上っていき、再び降って尾の先端が正面下部に収まる⑦。

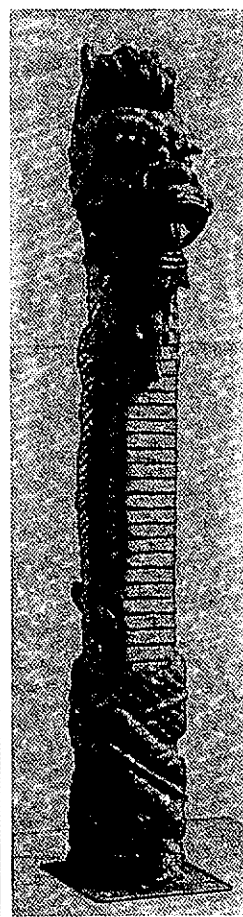
写真⑦



油土による復元(縮尺 $\frac{1}{5}$)
脚や巻きついた尾の方には起伏があり生き生きしている。



薄板状の鱗、腹板均一で装飾的である。



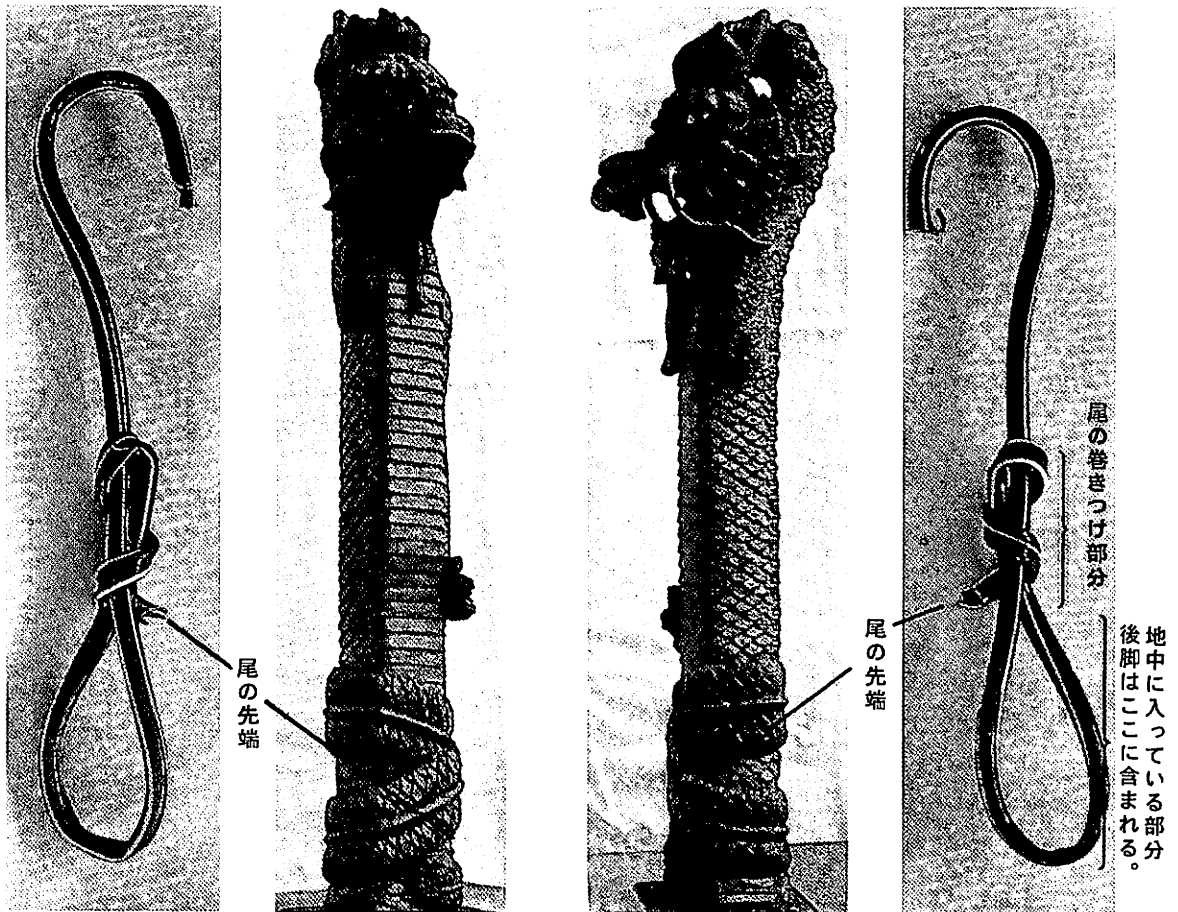
復元(縮尺 $\frac{1}{5}$)
大龍柱阿形
尾の先端の処理の仕方がデザインの

このようにして、巻きつけ部分に量を多くとらずに角柱の枠の中に収めることによって、柱の垂直感をくずさず、しかも安定感のある形をついている。

ゴムホースで、その龍の形態を再現すると、写真③のようになる。又、胴体巻きつけ部分の形は、普通に考えれば、胴体の太さ大きさが、そのまま巻きつくわけであるので、このように整頓化された形にはならない。

上下に伸ばされた前脚は、肉厚も含め写実的な描写で表現すれば、胴体から離れ、垂直に伸ばした胴体の印象を弱めるとともに、複雑な形となって龍柱の持味をなくしてしまう。実際には宝珠を持った脚は、頭部にとけこみ、目立たない程である。下方にもっていった脚も、同じく胴体より出っ張ると、石という素材からして欠けたり壊れやすい。

写真③ 龍柱 - 形態分析



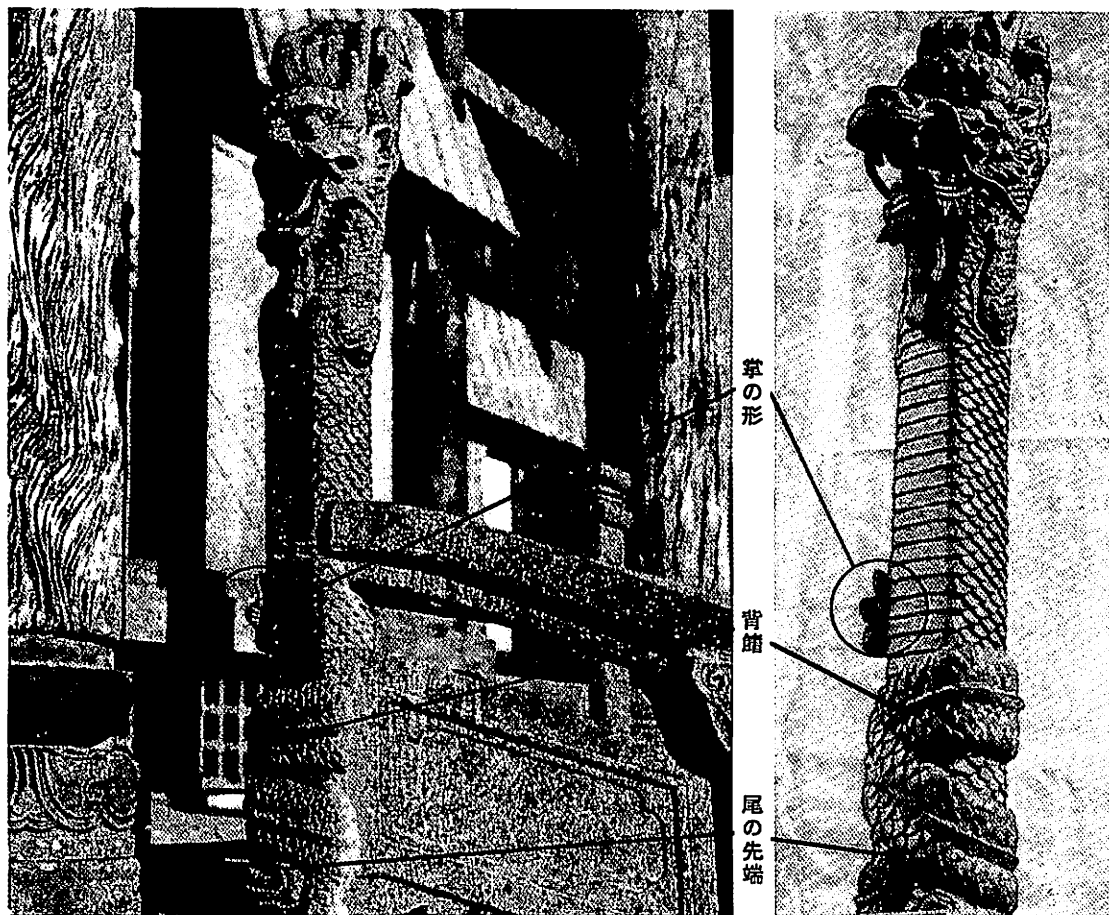
大龍柱 咩形

大龍柱 阿形

垂直に伸びた胴体の上部と下部は、上の写真のようになるのではと思われる。それは下部巻きつけ部分を解明することによって明らかになった。咩形と阿形とでは、尾の巻きつけ方も異なる。ゴムホースを用いて、流れを試みる。

この部分は、戦前までの写真では欠落破損しているのですが、この形が創建当初の形になっているかは、今後の調査にゆだねるが、正殿階段上段にある小龍柱（写真㉔）の形態と類似しているのです、復元報告書において裏付けしてある通りであるという予測はできる。

写真㉔ 小龍柱（阿形）と大龍柱（阿形）の比較

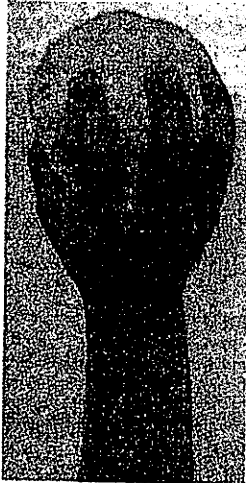


首里城正殿前 小龍柱（阿形）

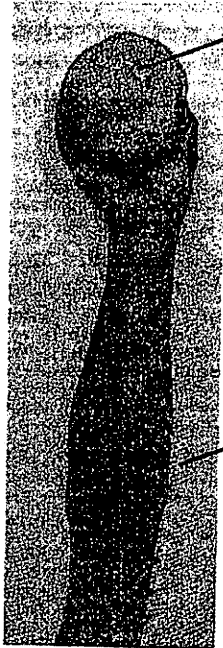
縮尺 $\frac{1}{5}$ 大龍柱（阿形）
復元全体像

宝珠を握った掌の表現は、写真④のようである。掌の内側を外に向けて宝珠を握っている。脚の肘には毛がはえているのも特徴であるが、この龍柱の肘の毛のはえている箇所は、なますろけ 鱧の交又するところである。

写真④
宝珠を握った掌の表現



爪は4本である。掌の外側は龍柱の場合は、頸部にとけこませる。



宝珠

肘に毛が表現されている

掌の内側が外に向けて表現されている。



前脚の内側には凹みを手首の方まである。このような特徴は、人間の手の内側にも感じさせる。



爪(四本)

宝珠

胴体の装飾的で均一な鱗と比較すると起伏があり、生き生きとした感じを与える。

龍柱の爪は4本である。鋭い爪が宝珠を握る。頸部にとけこませている。

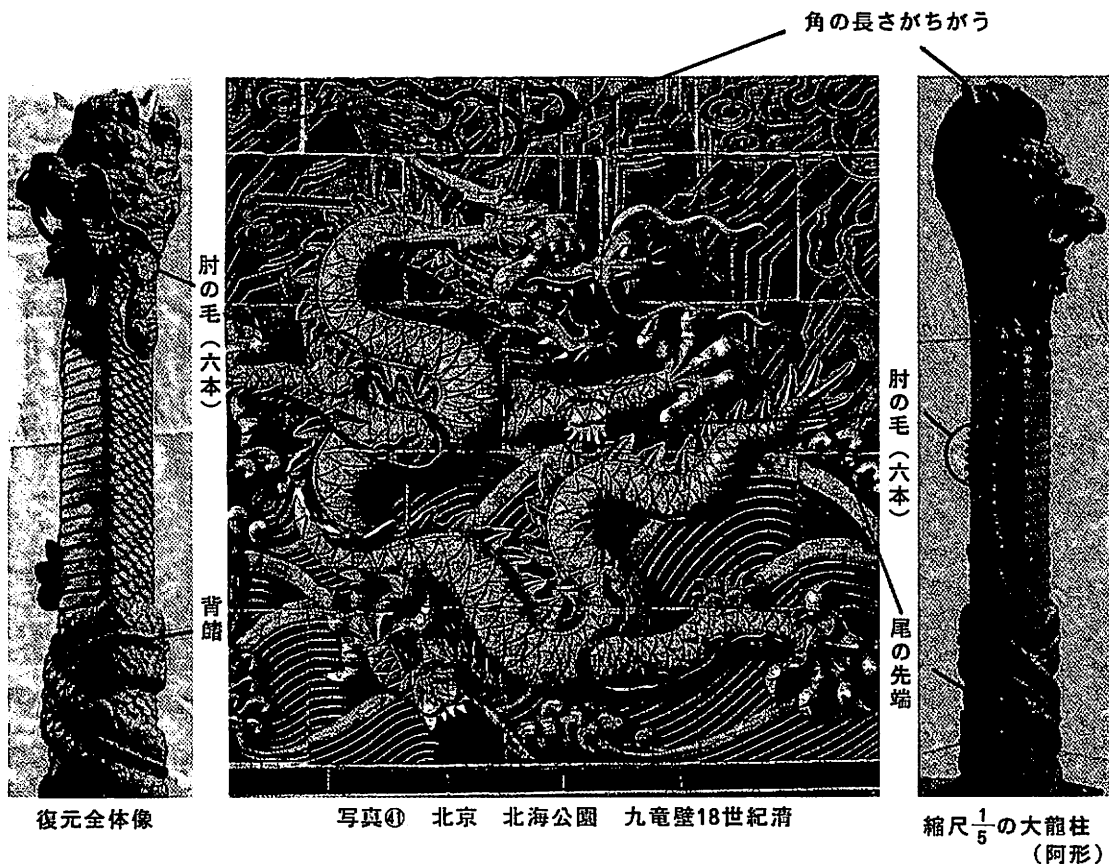
胴体の均一で起伏もない完全に装飾的な鱗や腹板に対して、脚には起伏があり、鱗もその形によって蠢^{うごめ}いている。肩から肘、手首にかけての鱗は、徐々に小さくなっていき、生き生きした特徴を捉えている。又、龍には、普通火焰が附随している。この龍柱においても、前脚肩から頸部にかけて火焰が文様化されて施されている。火焰は内側を凹ませることにより、陰影を与えて起伏を感じさせている。その為、火焰に動きが現われ効果を挙げている。

脚の付け根周辺に火焰が施されているが、後脚が表されていないのが気になり、縮尺 $\frac{1}{5}$ に復元する際、下部の尾を巻きつけた部分を、慎重に検討したのであるが、火焰は施されていたが、後脚らし

い形は見当らなかった。このことから判断すると、火焰が施されている下、つまり地中に後脚が隠れているということとなる。これも前脚を胴体部にとけこませ、余り目立たない表現と同種の表現と受け取ることが出来る。

龍の爪は一般的に3本、又は4本で表現されている。爪の数でその龍が使われる人の位が決まっており、5本の爪という場合は中国皇帝の使用となっている。その為、首里城正殿の龍柱は4本爪である。先にあげた漆器や紅型、刺繍といった美術工芸品に表わされた龍も、ほとんどが3本爪か4本爪であり、5本爪がみられたのは中国風の衣装だけであった。

2 同位部の比較 (写真①)



復元全体像

写真① 北京 北海公園 九竜壁18世紀清

縮尺 $\frac{1}{5}$ の大龍柱 (阿形)

3 材質と技法

首里城正殿の龍柱は石造であるが、幾度かの正殿焼失の際、それに伴って再建がなされた記録がある。

18世紀の首里王府は財政的に苦しい時期でもあり、約3mという大きさの龍柱を彫るに耐える質と大きさの石材を探すのに苦慮している様子が伺える記録である。

そのような中で造られた龍柱ではあるが、現存する龍柱の遺物を見ると、細粒砂岩（俗称ニーピヌフニ）に彫刻したその技術や表現力の確かさが伺えるものとなっている。ニーピヌフニは粒子の細かな目のつまった砂岩であり、この種のものとしては、硬く彫刻するのに適している。沖縄では、昔から橋の支柱、勾欄羽目板、石碑、獅子像、屋根の棟や鴟吻等に用いられ、すぐれた彫刻作品が多く残されていた。

写真④ 細粒砂岩（ニーピヌフニ）の吸収性による変化



雨天の際は、龍柱頭部には水気を吸収し、焦茶色になる。

この砂岩は、沖縄本島の中部と一部周辺島嶼に小面積ずつ分布している推積岩^④で、山として採石されるところはなく、地中から塊状で掘り出されることが多く、大きな塊を得ることは難しい。この為に産出量は少なく、しかも推積岩である為、平板なものが多く、層があり、外側は柔らかく中心部が硬いという性質を持っている。

彫刻するのに適しているのは中心部で、青灰色をしているが、空気にふれると、徐々に茶色味を帯びてくる。この石の断面は、外側に焦茶で柔らかい層が、内側に茶、淡黄色の変化があり、砂岩自体に鉄分が含まれているために、酸化して変色していくと考えられる。

又、砂岩である為、徐々に風化現象があり、古い碑は摩耗がはげしく、文字等判読するのに困難をきたしている場合が多い。

首里城正殿の龍の一部、現在沖縄県立博物館の正面玄関前に据えられている吽形頭部は、ヒゲの欠落破損はあるが、ほとんど原型をとどめている。この像は茶色味を帯びた色あいで、柔らかな感じを与え、暖かみがあり、おおらかさを感じさせる。雨天で水気を含むと焦茶色に変色し、引きしまった感じを与え、晴天の時には、明るい灰褐色を呈する（写真⑤）。



晴天の際の龍柱頭部は、明るい日射しをあび、暖かい色調を帯びる。

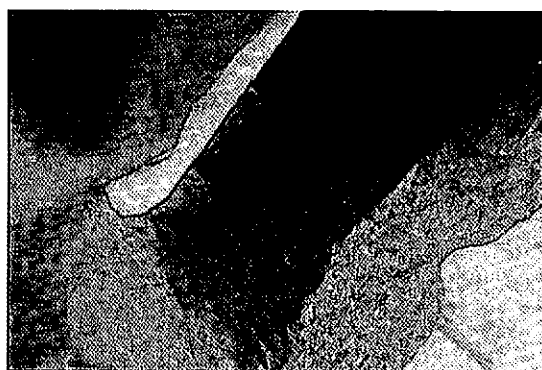
この龍柱は当初、四個の細粒砂岩を組み合わせ造られたという記録がある。機具類の発達した現在でも、これだけの仕事は大変なことであり、創建当時の状況を考えると、かなりの技術者が関わったと思われる。彫りに使われた刃物類も果してどの様な物であったのか、沖縄の鍛台屋の流れをかいつまんで調べても、つまびらかでない。筆者自身の細粒砂岩を彫った経験と照らし合わせても、刃の摩耗が激しく、特に細部表現では刃物をすべらすように削るという手法がしかできず、無理をすると石が欠けたり、深く喰い込んだりとなることが多い。

現存する呷形頭部には、刃物の跡は見えず、表

面が均一でなめらかな地肌を持っている。昭和53年1月12日の沖縄タイムスに、故山元恵一、玉那覇正吉や山里永吉の諸先生方の談話が載っている。そのおおまかな内容は、龍柱頭部は型取りをし、その中にセメントを流し込んだのではという見解である。そのように見える程、この頭部は精巧で彫り跡が見られない。先般、龍柱を縮尺 $\frac{1}{5}$ で復元する機会があり、この頭部の調査を行ったところ、顎の下や頸部の丸味の中側の剃り抜かれた箇所には刃物の跡が伺えた（写真③）。このことや、長い年月の風化からして、創建当初は鑿（刃物）の跡もあり、全体的に現在よりも厚みを感じさせたのではないかと考えられる。



頸部にあたる内側にも削った跡が残る。



顎髷の内側に整で削った跡が残っている。

写真③ 大龍柱（呷形）頭部
鑿跡のある箇所

IV むすび

上記のように形を追求してみると、石という素材の中での抑制された表現であると同時に、垂直に伸び眺みつける構えは、首里城正殿に相応しい門衛像であり、建物に附随したものとしてよく調和がとれている。

中国では、屋根の棟を含めていたるところに龍の彫刻があり、中国の人は、自分を龍の国の人々というほど、龍に対する崇拜は長く続いている。沖縄においても首里城正殿にみられるようにその影響は大きい、美術工芸品以外ではあまり普及はしてないように思われる。獅子像の方が沖縄においては受け入れやすく、龍が存在を失くしたのか、又は表現する上での形態の難しさからか、首里城以外では余り見られない。しかし、この龍柱のようなフォルムの追求は、これだけが単独に突然できるものではなく、伝統的な土壌と手本になる物があっての上で造られたとしか考えられない。

龍の形態のところでも述べたように、龍は想像上の動物で、しかも種々の動物を組み合わせた表現であるので、国により、制作者により表現の仕方が少し異なる。

この龍柱は、爬虫類の胴体を取り、脚はトカゲの形態をとって、爪は猛禽類である。上唇をみると馬の特徴が出ていて、顔全体、鬣も含めて馬の頭部の雰囲気がある。額の周辺は駱駝を思わせ、角は雄鹿、耳は雄牛、鱗は魚と混在している^⑩。

このような龍柱という特殊な形態は、首里城の王府としての威厳と権威を高めるため編み出されたと考えられる。

引用・参考文献

- ① 世界大百科事典31 1972年4月25日 平凡社

竜 ヨーロッパ 松谷健二
 オリент 板倉勝正
 インド 前田恵学
 中国 森三樹三郎
 日本 上田正昭

P516～517

- ② 鬼龍子—中国の鬼瓦— 昭和39年8月30日

エードワルト・フックス著
 刀江書院編集部訳 刀江書院

中国の屋根 P16

中国人の宗教的観念 P25

鬼龍子の象徴的な意味 P32

- ③ 中国画報 1987 5

北京の古代建築物を飾る彫刻 P40
 株式会社 東方書店

- ④ 沖縄文化の遺宝 1982年10月12日

鎌倉芳太郎著 岩波書店
 写真掲載番号 42. 43. 44. 45. 52.
 137. 230. 283. 399
 436. 441. 447

- ⑤ 龍頭宝幢（高麗時代）12～13世紀

小型の旗ざお
 韓国美術5千年展 カタログより
 朝日新聞社発行

- ⑥ 雲龍図 海北友松筆

重文京都・建二寺本坊
 原色日本の美術13 小学館

- ⑦ 学研生物図鑑 動物 ほ乳類編

監修 今泉吉典 学習研究社
 ケープコブラ（写真） P182

- ⑧ 首里城予備設計報告書 昭和63年3月

5. 首里城正殿大龍柱（縮尺 $\frac{1}{5}$ ）復元
 経過について—西村貞雄—P65～80
 沖縄総合事務局、国営沖縄記念公園事務所

- ⑨ 沖縄大百科事典（下巻）1983年5月30日

ニービ 稲嶺盛三郎 P102～103
 沖縄タイムス社

- ⑩ 幻獣辞典

ホルヘ・ルイス・ボルヘス
 マルガリータ・ゲレロ
 柳瀬尚紀 訳
 東洋の竜 P74 昌文社